

# 国語

## はじめに

本書は、高校入試で最頻出とされる問題に着目し、パターン別に構成した教材です。

入試本番で確実に得点するためには、頻出の問題パターンに慣れておくことが必要不可欠です。国語は着実に得点を狙える「古典」に絞り、近年の入試問題を徹底分析したうえで、学習しやすい配列で構成しています。

本書全体およびそれぞれの課では、問題を難易度の低いものから高いものへ、構成が単純なものから複雑なものへと順に出題していきます。できるだけ多くの問題を解き、短期間での得点力アップにつなげてください。

また「解答と解説」では、知識問題や内容読解に必要な解き方をまとめています。問題に取り組んだ後はしっかりと解き方を確認し、入試に対応できる実戦力を身につけましょう。

## 目次

1	古文基礎	2
2	古文読解	8
3	漢文	16
4	融合問題(1)	24
5	融合問題(2)	32

# 1 古文基礎

## 1 仮名遣い

次の言葉を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

(1) いにしへ 〈18千葉〉

(2) いづこ 〈16山口〉

(3) あはれ 〈18秋田〉

(4) いとほし 〈18秋田〉

(5) たぐひなく 〈18長野〉

(6) きはめたる 〈18大阪A〉

(7) つひやし 〈17千葉〉

(8) やはらぐる 〈18兵庫〉

(9) いひあへり 〈18熊本〉

(10) おほかた 〈17青森〉

--	--	--	--	--	--	--	--	--

(11) ふかるるやうに 〈16埼玉〉

(12) めて 〈17広島〉

(13) ゆゑ 〈18佐賀〉

(14) かうむり 〈18石川〉

(15) かやう 〈18岐阜〉

(16) よささう 〈16茨城〉

(17) なほごうごうしけれ 〈18三重〉

(18) うつくしうて 〈18島根〉

(19) 交はり 〈18山梨〉

(20) 養はれん 〈18山形〉

--	--	--	--	--	--	--	--	--

## 2

### 仮名遣い

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈16東京〉

この頃の花こそ初心と申す頃なるを、極めたるやうに主の思ひて、はや申まをさ樂がくにそばそみたるあ輪説をし、至りたる風体をする事、ああさましき事なり。たとひ、人も褒め、名人などに勝つとも、これは一旦めづらしき花なりと思ひ悟りて、いよいよ物まねをも直すにし定め、名を得たらんに事を細かに問ひて、稽古エをいや増しにすべし。

〔風姿花伝〕による

5

(注)申樂：日本の古い芸能の一種。

「そアばみたる」「あイさましき」「たウとひ」「いエや」のうち、現代仮名遣いで書いた場合と異なる書き表し方を含んでいるものを一つ選び、記号で答えなさい。

## 3

### 仮名遣い・作品の種類

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈18滋賀〉

思ひつつ 寝よればや人の 見えつらむ 夢と知りせば 覚めざらましを

(1) 「思ひつつ」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

(2) この作品の種類として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 俳句    イ 漢詩  
ウ 和歌    エ 随筆

## 4

### 比喩・和歌の季節

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈17富山〉

五月ついたちごろ、つま＊近ちかき花はな橘たちの、いと白く散りたるをながめて、  
軒先時＊ならはずはふる雪かとぞながめまし花はなたちはばなの＊薫からざりせば  
季節はずれに眺＊めたことたらうに＊薫かつていなかつたら

〔更級日記〕による

(注)花橘：香り高い白い花をつける木。ここではその花のこと。

(1) 「花橘の、いと白く散りたる」とありますが、それを見て作者が連想したものは何ですか。本文中から書き抜きなさい。

(2) Aの歌の季節を漢字一字で書きなさい。

## 5

### 古典知識・仮名遣い

次は、「枕草子」の冒頭の部分です。これを読んで、あとの問いに答えなさい。

〈18宮崎〉

春は  ①。やうやう白くなりゆく山ぎは、すこしあかりて、紫だちたる雲のほそくたなびきたる。

(1) ①に入る言葉を、ひらがなで書きなさい。

(2) 「やうやう」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

# 6

## 仮名遣い・係り結び

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔17秋田〕

めづらしと言ふべき事にはあらねど、文こそなほめでたきものには。は  
 るかなる世界にある人の、いみじくおほつかなく、いかならむと思ふに、  
 文を見れば、ただいまさし向ひたるやうにおほゆる、いみじき事なりか  
 し。

(注) 文…手紙。

おほつかなく…心配で。

〔枕草子〕による

(1) 「言ふべき」<sup>①</sup>「いかならむ」<sup>③</sup>を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書き  
 なさい。

①

③

(2) 「文こそなほめでたきものには」のあとに語句を補うとき、最も適切なもの  
 を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア あら
- イ あり
- ウ ある
- エ あれ

# 7

## 係り結び

次は、「徒然草」の冒頭の部分です。これを読んで、あとの問いに答え  
 なさい。

〔18京都〕

つれづれなるままに、日暮らし、硯すずりに向かひて、心にうつりゆくよしな  
 し事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

〔徒然草〕による

「ものぐるほしけれ」のように、「係り結び」によって結びの部分が変化して  
 いる文として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。

イ あるとき思ひたちて、ただ一人、徒歩かちより詣までけり。

ウ 月のころはさらなり、闇もなほ、螢の多く飛びちがひたる。

エ 春風に一もみ二もみもまれて、海へさつとぞ散つたりける。

# 8

## 主語把握

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔17長崎〕

ある在家人\*さいけにん、山寺の僧を信じて、世間・出世\*深くたのみて、病む事もあ  
心から頼りにして、病気になる

れば薬までも問ひけり。  
薬についても尋ねた

〔沙石集〕による

(注) 在家人…僧にならず一般の生活を営みながら、仏教を信仰している人。  
 世間・出世…日常生活に関わること・仏教に関わること。

「薬までも問ひけり」の主語を書き抜きなさい。

9

言い換え・仮名遣い・内容把握

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈17和歌山〉

月日は百代の過客<sup>①</sup>にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上<sup>②</sup>に生涯を浮かべ、馬の口<sup>③</sup>とらへて老いを迎ふる者は、日々旅にして、旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。

（「おくのほそ道」による）

(1) 「過客」と同じ意味の語を、本文中から書き抜きなさい。

(2) 「とらへて」を現代仮名遣いに直して書きなさい。

(3) 「古人も多く旅に死せるあり」の内容として最も適切なものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 昔の人の中にも、旅の途中で亡くなった人が多い。
- イ 亡くなった人の多くも、死ぬ前に旅を思い出した。
- ウ 年老いた人も、旅を夢見て亡くなる人が多い。
- エ 旧友の多くも、旅する前に亡くなってしまった。

10

仮名遣い・主語把握

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈18静岡〉

粗忽なる若衆、餅をまゐるとて、物敷を心がけ、あまりふためひて、喉そこのそそっかしい若者が召し上げるひとつでも多くあわててに詰まる。人々せうしがりて、薬をまゐらせても、この餅通らず。

何かといふうちに、天下一のまじなひ手を呼びければ、やがてまじなふそつこうしているうちにすぐに折って

て、そのまま、ちりげもとを、一つ叩きければ、りうごのごとくなる餅、エタ真ん中がくびれた形をした

三間あまり先へ、飛んで出る。

（「きのふはけふの物語」による）

（注）まじなひ手…ここでは、神仏などの力を借りて病氣などを取り除く者。

ちりげもと…ここでは、背中側の首のつけ根のあたり。  
三間…約五・四メートル。

(1) 「まゐる」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

(2) 「詰まる」「呼びけれ」「まじなふ」「叩き」から、その主語に当たるものが同じであるものを二つ選び、記号で答えなさい。

# 1 主語把握・仮名遣い・会話文の指摘

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈18富山〉

よく物を心にとめてわすれぬものが、「むかしいづこの山にのほりしが、  
記憶して 数本 どこかの山に登った  
 かかる峰に松のいくもとありて、そのうちにかく枝たれたるに、いま一本  
こんな こんなに枝が垂れているのに  
 は高くそびえてたてり。そのかたはらにまきの大きやかなるが、横ざまに  
ア イ  
 生ひいでて、青つづらのかかりしさまイなどかたるに、いとこまやかに  
 おぼえ給たまふ物かな。君が庭も、その山によりてつくり給ひしや。松のある  
覚えていらつしやるのですね まねて  
 なかにまきのみえたるが、姿はいかにありしかなどたづぬれば、「わが庭  
 にもまきのありしや。つね見はべればわすれたり」といひき。  
あつたかな エ  
どようであつたか

(注) まき…ヒノキ・スギなどの常緑の針葉樹の総称。  
 つづら…つる草の一種。

〔花月草紙〕による

- (1) 「たてり」「かたる」「わすれたり」「いひき」の中で、その主語に当たるものが他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。
- (2) 「かたはら」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。
- (3) 本文中には会話文であることを示す「」が抜けている箇所があります。その会話文の最初と最後の三字を書き抜きなさい。

最初		最後	
----	--	----	--

# 12

## 接続助詞・語句・作者の心情

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈16奈良〉

十月つごもりがたに、あからさまに①来てみれば、こ暗くらう茂れりし木の葉  
かみづき\*  
 ども残りなく散りみだれて、いみじくあはれげに見えわたりて、心地よげ  
②  
 にささらぎ流れし水も、木の葉にうづもれて、あとばかり見ゆ。  
 水さへぞすみたえにける木の葉散る嵐の山の心ほそさに  
 訳 澄んだ水までもが澄むどころか住むことをやめてしまったのだ  
 〔なあ。木の葉が散る嵐の山の心細さに。〕  
 (注) つごもりがた…月末頃。 あからさまに…ちよつと。 あと…流れの跡。  
 〔更級日記〕による

- (1) 「来てみれば」の意味として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア 来てみると イ 来なくても  
 ウ もし来ると エ 来てみても
- (2) 「ささらぎ」の動詞からは、水が音を立てて流れていることがわかります。この流れの様子を表す副詞を四字の現代語で書きなさい。
- (3) この文章に込められた筆者の思いの説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。
- ア すっかり木の葉が落ち、水の流れも見えなくなった十月末の静かな東山は、かえって夏よりも趣があると感動している。
- イ 木の葉は散り水はかれ、動物の姿も全く見えなくなってしまった東山を訪れ、生命力にあふれた夏をなつかしんでいる。
- ウ 嵐によって様変わりした東山を見て、自然の猛威の前では人間は無力であると知り、この世の無常を悲しく思っている。
- エ 木の葉が散った東山で、自分が去った後に水の流れまでもが見えなくなっていたことを発見し、寂しさを実感している。

--	--	--

--

# 13

## 仮名遣い・主語・会話文の指摘

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈18三重〉

むかし、男、いとうるはしき友ありけり。かた時さらずあひ思ひけるを、人の国へいきけるを、いとあはれと思ひて、別れにけり。月日経ておこせたる文に、

あさましく、あきれほど対面せで、月日の経にけること。お忘れになったのだろうか

と、いたく思ひわびてなむはべる。世の中の人の心は、あわずに離れていれば忘れ目離るれば忘れぬべきものにこそあめれ。ひとく 悲しく思つて

といへりければ、よみてやる。歌を詠んで離る

② 目離るとも思ほえなくに忘らるる時しなればおもかげに立つ離れてあわずにいるとも、とても思いませんのに。あなたを忘れられる時なんて片時だつてないので、いつもあなたが面影に現れて、目の前にいます。

〔伊勢物語〕による

(1) 「あはれと思ひて」を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。


(2) 「おこせたる」「思ひわび」「いへりけれ」「よみてやる」の中で、その主語に当たるものが他と異なるものを一つ選び、記号で答えなさい。

--

(3) 「目離るとも思ほえなくに忘らるる時しなればおもかげに立つ」の和歌は、手紙の中のどのような問いかけに対する返答として詠んだものですか。文章中の古文から十字で書き抜きなさい。


# 14

## 省略された述語・会話文の指摘・仮名遣い

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

〈18香川〉

九国ある国の主、東関に参られける時、前舟には某氏をなんと若き家老のはかりて啓せしに、主曰く、某なる者先祖武功の名ありて、彼もまた武業に拙からざれば、舟の先に置くべき事もつともながら、いまだ船中にして人を左右する事は、馴れざるべし。いはんや風波の時船を指揮せん者、海上の事にうとからば、時にとりてあやふかるべし。度々渡海して案内よく知れる者を選ぶべしといへりしと、その国の人語りしこそ、げにもと覚え侍る。〔塩尻拾遺〕巻四十七による

〔注〕九国：九州。 東関：関東。

某：具体的な名をあげないで、その人を指し示す語。

はかりて啓せしに：計画して申し上げたところ。

いはんや：ましてや。 げにも：なるほどその通りだ。

(1) 「前舟には某氏をなんと」とありますが、ここではどのようなことをいっていますか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 先頭の船に某氏を乗せることには、賛成いたしません
- イ 先頭の船に乗る某氏に、いくら報酬を与えましょうか
- ウ 先頭の船に乗る者として、某氏をおすすめいたします
- エ 先頭の船に乗って、某氏とともに私も参上いたします

--

(2) 「主曰く」とありますが、主が言った言葉はどこまでですか。最後の五字を書き抜きなさい。


(3) 「あやふかる」を現代仮名遣いに直して書きなさい。

--